

武蔵野日曜集会

愛

――ローマ書第8章31～39節――

1978年7月2日(武蔵野)

小池辰雄

裂火 聖霊の執成し キリストの愛は贖罪愛 聖霊の執成し キリストの愛は贖罪愛 愛のキリスト キリストの軍人 勝ち得て余りあり この一戦 愛の国 神の愛 愛の絶叫 羔の怒

【ロマ8・31～39】

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。 32 己の御子^{みこ}を惜ま^すずして我ら衆のために付し給^{わた}いし者は、などか之にそえて万物を我らに賜わ^{たま}ざらんや。 33 誰か神の選^{えら}び給^{たま}える者を訴えん、神は之を義とし給^{たま}う。 34 誰か之を罪に定めん、死にて甦^{よみが}えり給^{たま}いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給^{たま}うなり。 35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難^{なやみ}か、苦難^{くるしみ}か、迫害^{うへ}か、飢^うか、裸^{はだか}か、危険^{あやうき}か、剣^{つるぎ}か。 36 録^{しる}して『汝のために我らは、終日^{ひねもす}、殺されて屠^{ほふ}らるべき羊の如きものと為^せられたり』とあるが如し。 37 然れど凡^{すべ}てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼^より、勝ち得^{あま}り余あり。 38 われ確^{かた}く信^{しん}ず、死も生命^{いのち}も、御使^{みつかい}も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹ 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得^えざることを。

●裂火

今日は「愛」という題です。どうにもならんです、これは。今日は永遠のひと時ですね。よくいらつしやいました。今日は何がなんでも来てもらいたかった。いや、日曜日は、何でもかんでも来ていただきたいんです。お客さんがやってきても、

「日曜はダメだ」

と言って、待たせておくなり、一緒に連れてくるなり、女の方もそれくらいの意気込みを持ってください。私たちにとって日曜集会は、キリストとの取っ組み合いの、生命がけの集会なんですから。

パウロは、今日は絶叫している。これはいわゆる言葉ではない。霊言、異言、叫びです。これは呻きでなくて叫びです。旧約聖書に「祈る」ことを「叫ぶ」とよく書いてある。叫



ぶというのは、なにもでつかい声を出せということではない。それは時には、でつかい声も出ますけれども。沈黙の雄叫び^{おたけ}というのものもある。とにかく、祈りはどんなに小さい声であっても、質的にはみな叫びです。「さけび」とは「裂火^{さけび}」と、こう書こうかな。今瞬間に思いついた。火が爆裂すること。裂火^{れっか}という。裂火の勢いがあります。

³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、

なかなか文語訳はいいですね。日本語というのは非常に豊かなんです。文語であろうと、口語であろうと、自在に使わなくてはいかん。

此等の事につきて

「関して」で結構です。「対して」というような言葉でもありますけれども。

神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。

ギリシヤ語原文はその通りです。しかし、パウロは、「もし」なんて言っているけれども、私たちは読むときは、「もし」ではない。

「神が我らの味方であるが故に、誰か我らに敵せんや」

と読む。現実をハッキリと言う。パウロさんのその奥はその気持ちでしょうけれども、「もし」なんて言われたのでは、

「どうも味方でないかも知れない」

なんて思いかねない。「もし、味方ならば」と、そういう文字通りに取ったらダメですよ。文字の奥を読んでいかないとね。

「神さまは我々の側に立って、我々のために思ってくださいって」

と。非常に簡単なんです。字がそれしかない、動詞がない。

「誰が我々に対して、反対して」

という、それだけの字で、これも動詞がない。非常に強い言い方です。

「誰が我々に反対できるか」

と。「敵せんや」という強い訳は結構です。神さまは我々の味方である、天下無敵である。無敵艦隊で、敵なしという。

この世の戦いでは、同じ次元に立ったらダメですよ。同じ次元に立ったら、頭のいいやつだとか、口八丁なんていうやつに負けますから。もう一つ高い次元に立ってしまう。向こうがやり込め得ないところの次元に立って、そこからものを言う。もともとそれが根源の私たちの現実なんだから。神が味方であるから、誰が敵する者があるか、無敵であると。

●聖霊の執成し

³²己の御子を惜まずして

全く惜しまないと書いてあります。

我ら衆^{すべて}のために^{わた}し給いし者は、



「付す」というのは十字架にかけること。

などか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。

私たちに与えてくださった。そのことを一番よく言っているのは、ヨハネ伝3章16節、

「¹⁶それ神はその独子^{ひとりご}を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡

びずして永遠の生命を得んためなり」(ヨハネ3・16)

「世を愛した」というんだから。「世」というのは敵なんです、ヨハネ伝でいう「世」というのは、罪の世だから。神さまは罪の世を、敵を愛した。「その独子を賜うほどに」、独子を犠牲にするほどにまで敵を愛した。だから、それを受けなければ亡びてしまう。「信する者の亡びずして」だから、信じない者は亡びる。彼によりて、永遠の生命を受けるわけです。パウロは大きいですよ。

「などか之にそえて万物を賜わざらんや」

と。神の御子をくださる、万物が自然に我々のものだという。「我々のもの」というのは、私する意味の「もの」ではない。万物は私たちの生命の延長みたくで、本当に深い交わりの中に、大自然と溶けてしまう。ゲーテなんていう詩人は、万物と溶けたような魂です。『芸術の魂』(小池辰雄著作集第二巻 1976年刊)をお読みになったら、そのことをお感じになつたでしょ。

「タ・パンタ」「一切」という。「カリステタイ」「恵みを賜る」という字が使つてある。賜物^{たまもの}のようにして賜るわけです。万物がカリスマ的に私たちの生命の延長の中に入ってしまうというわけだ。

「キリストを持つ者は一切を持つ」

という。クリスチャンというのは、けちくさいものではない。

「無一物無尽蔵」

と禪宗で言うけれども、本当にクリスチャンはそれを持つている。こつち側は無一物だ。有れども無きが如し。プロティノスが「二者」という言葉が好きだった。この「二者」は、もうひとつ言うところ「唯一者」だ。キリストという一者を持つと、これは万物が自然に備わる。このキリストを持てば一切を持つ。宇宙的な存在ですから。まあ、パウロは凱歌を上げていますね。愉快でしょうがない。

³³誰か神の選^{えら}び給える者を訴えん、

我々は選ばれた者、全然こちら側の資格がない。神さまの選^{えら}びというのは無条件です。選ばれた者は、神さまの無条件的な愛で選ばれているわけです。選ばれた者は必ず使命を持つている。神の選^{えら}び給える者を訴えるわけにはいかんと。

神は之を義とし給う。

キリストに在つてこれを義とし給うんです、もちろん。

「神の義は福音の中に現れた」



という。神の義は福音体であるキリストに現れた。これは与える義であるから。「義とする」という言葉面の意味は、法的な意味ですけども、内容は「義という実質を与えた」ということです。

³⁴ 誰か之を罪に定めん、

もう、義とされているから――義の反対は罪ですから――罪することができないと。そのことはロマ書8章の初めの方にも出ている。

死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給うなり。

まあ、素晴らしい言葉ですね。十字架の贖罪死を遂げて、そして甦えった。即ち、霊生をもつて現れたところのイエスは、今天界に在^{いま}って、昇天して我らのために執成^{とりな}していらつしやる。霊界の大祭司です。聖霊の執成し、キリストの執成しです。

³⁵ 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難^{なやみ}か、苦難^{くるしみ}か、迫害か、飢か、裸か、危険^{あやうき}か、剣^{つるぎ}か。

これらの言葉を畳みかけて言っているが、一つ一つは重い内容をもっている。というのは、パウロはコリント後書11章に書いてあるような、もろもろの患難に遭^あつていますから。

「²³ 彼らキリストの役者^{えきしや}なるか、われ狂える如く言う、我はなお勝^{まさ}れり。わが労は更におおく、獄^{いどや}に入れられしこと更に多く、鞭^{むち}うたれしこと更に夥^{おびた}だしく、死に瀕^{のぞ}みたりしこと屢^{しばしば}次なりき」(コリント後11・23)

と言つて、さんざん迫害の難を畳みかけて書いてあるでしょ。それがこの一つ一つから来ているわけです。「患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か」と。「剣」というのはもちろん殉教のことです。

³⁶ 録^{しる}して『汝のために我らは、終日^{ひねもす}、殺されて屠^{ほふ}らるべき羊の如きものと為^せられたり』とあるが如し。

これは詩篇44篇22節の言葉だね。これがキリスト者の現実である。

「汝、神のために我ら初代キリスト者たちは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものとせられている。」

福音のために、キリストのために、神のためにと。「ために」は「故に」でもある。「故に」が先です。それから、「ために」ということ。「故に」は理由、「ために」は目的です。理由と目的が一つ。要するに、十字架を負わされる。

●キリストの愛は贖罪愛

だけれども、このキリストの愛は――今日はただ一字「愛」と書きましたがけれども――聖霊の愛、キリストの愛、神の愛ということ。ロマ書5章5節に、

「⁵ 希望は恥^{きた}を来^{きた}らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に



注げばなり」(ロマ5:5)

とある。「聖霊によりて神の愛」とは、聖霊の愛、神の愛、キリストの愛と同じことです。けれども、何と言ったって、キリストが具体的な中心です。十字架です。

「誰か罪に定めん」というのは、キリストの愛は贖罪、愛であるから。罪を贖った愛だから、我々は罪から解放されてしまつて、

「無罪放免となつてゐるから、誰か罪に定めるか」

と。キリストで、十字架で救われた者を——その現在がどうであろうと、過去がどうであろうと、未来がどうであろうと——そんなこちら側の相対的現実がものを言っているのではない。もし、そうだったら、十字架は空しくなる。

仏教でいうと、弥陀の「大慈大悲」だね。孔子や孟子だと、「仁」とか「恕^{じよ}」とかいう。「恕」というのは思いやりという字です。

この頃は、恕の心がなくなつてしまつたね、東京の人は。電車の中で顔を見ているとわかるよ。

「ああ、あの人に座席をゆずつてあげましょう」

という人は暁^{あかつき}の星の如くに少ない。

「坐つてしまつたらもう、あとはどうでも構わない」

なんて、そんな顔をしているよ、みんな。荷物を持つていても、それを膝の上にのせて上げようとしめないし。まあ、この頃の若い女でも全く。私は、それこそ呻き痛みを感じるね。

孟子の言葉に、

「仁也者人」

とある。これは「仁は人なり」と読む。仁が人の本質だという。人に情けをすることが、それが人の本質である。要するに、仁のない者は人ではないということです。

「惻^{そく}隠^{いん}の心無き者は人に非ざるなり」

と。思いやりのない、心のない者は人ではないと。孟子にみんなやられてしまう。私の『この道を往く』(1973年、獨協学園図書館 リンデンバウム叢書2)という本にちゃんと書いてある。お互いさま、普通の交際でもやはり、ニコニコして何か人のためにやってくれることは、みんなはうれしいでしょうが。あれはみんな、とにかく愛の表れなんです。もうそれが実は本質なので、普通は表れている。けれども、それが非常に希薄になつてきた。

「仁は人の心なり、義は人の路^{みち}なり」

と、孟子は別なところで言っている。「義は人の路なり」の、その「みち」は「路」の字が書いてあるからおもしろいね。やつぱり、孟子はちゃんと「仁」「義」と言っているよな。「仁義」という言葉もあるけれども。

義と愛は離すわけにはいかない。



「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というのは、義の叫びだよ。十字架に架かって、

「彼らを赦したまえ。その為すところ知らざればなり」

と。これは愛の祈りです。これが贖罪の十字架の二つの大事な言葉です。「なんぞ棄てたまいし」というのと、「彼らを赦したまえ」。それは深い呻きであり、力強い叫びである。

そして、「赦したまえ」という言葉は、私が言っている「砕け」なんです。十字架で砕かれた。イザヤ書53章です。

キリストの生命はそのような愛であつたから、彼が贖罪を遂げれば、それは甦えらざるを得ない。もの凄い生命力を持っている。霊生です。霊の生命力をもっている。この霊の生命力が私たちに臨んでくるときに、聖霊が働くわけです。

●愛のキリスト

「キリストの愛」が、今度は逆に、「愛のキリスト」になる。愛のキリストです、キリストをいただくんだから。「神さまが味方であるから」ではなくて、今度は、キリストが私たちの中に御霊をもつて臨んで来る。それで初めて本当にこの愛のキリストが生命的にはたらく。だから、愛の御霊、愛の神というように、具体的に全部、今度は「愛」が先に立っている。この愛のキリスト、愛の御霊が、絶対に力があるんです。

「愛は一切に勝つ」

というヒルティの好きな言葉がある。神は一切に勝つという、その力をもっている。力を持つているから、パウロが後で叫んでいる。

「誰がキリストの愛から私たちを離すことができるか」

というのは、

「誰が愛のキリストから私たちを離すことができるか」

ということ。「キリストの愛から」というのを、私はむしろ「愛のキリストから、離すことができるか」と逆さまに言いたい。愛というのは具体的なものだからね。愛の主体はキリストなんだから。この愛のキリストから誰が離せるかと。愛のキリストは御霊として、愛の御霊として、私の中に、皆さん一人ひとりの中に来ていらつしやる。それが本当の信の現実なんです。信仰と愛は一つです。「信ずる」とは「受けとる」こと。「愛のキリストを受けとる」こと。これから離すことができるかと。「患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か」と、いろいろありますけれども。

●キリストの軍人

私は先日、テレビでアメリカの軍事演習を見た。凄いね。また、二、三日前にソ連のミサイルの演習を見た。まあ、大変なものだ。恐るべき兵器です。ソ連とアメリカが本格的に



核戦争をやったら、30分以内で世界はどうかなくなってしまいうそうだ。とにかく、20世紀は一つ狂えばお終いという、危機的終末的現実です。なにしろ、ソ連の青年は18歳になると全部、軍務に服して、2年間か3年間か徹底的に鍛えられる。とにかく、猛訓練をやっています。日本の青年が——私はなにも戦争を謳歌しているのではないけれども——あれだけ鍛えている青年に勝てるかというんだ、もし戦争をしたら。いいのかね。私はなにも、これから日本が軍備しろとか何とか言っているのではないけれども。日本人は魂の世界で本当にそれだけ鍛えられているか。大学入学試験だなんだかんだと、そんなことばかり「ワッショイ、ワッショイ」とやって、一生懸命でいろんなことを詮索し工夫しているような、そんな教育界というものは本当になんというマイナスが多いだろうね。大英断の首相や文部大臣が出てこなければダメだ。いいんですか、そんなことで。

「学校なんかやめてしまえ。自分の自学自習で鍛え上げて、ひとつ戦え」
なんて、言いたくなるよ、私は。「戦え」というのは、本当に自分の全力をもつて真理のためにです。日本はそういう現実ですよ。

いいですか。滑っても転んでも、もうとにかく前進する。本当の意味の前進です。大抱負をもつて青年は突き進んでいく。人に何と思われようと、どう判断されようと、いいよ。兼好法師が言っている言葉を、私はあの『この道を往く』にも引用しておいた。一つのことでもつて邁進^{まいしん}しろと。棟方志功は命懸けで絵を書いた。

「絵の他は何も知らん絵バカ」

と彼は言っている。自分は絵のバカものだ。自分の目的に向かっては気違いのようにならないければ。そういう現実です。ノストラダムスの予言がヘタすると、当たるような危機的な20世紀です。

とにかく、昔の軍人は棄身だった。私は、なにも陸軍や海軍をどうこうするといっているのではないが、我々はみなキリストの軍人なんだ。戦人^{いくさびと}だ。この力ある愛のキリストに、ナポレオンはセントヘレナでキリストの前に頭を下げた。

「あなたは本当の勝利者だ」

と。いいですか。この烈々たるキリストの生命を本当に受けとってくださいよ。もう全く、日本なんていうのはこんな呑気な、また余計なエネルギーをつかって、全く魂が——結局、本当の道德の世界も、道德だけではどうにもならないけれども——福音をなみしているから。また、今のキリスト教がダメだから、仏教がダメだから。キリストをいただいたものは戦わなくは。

そういう戦いです。魂の戦い。断じて屈しない。また、この戦いは天下無敵であると同時に、その無敵の意味は相手を救うから、救う力を持ったものが一番の力なんです。担いの力です。これがコリント前書13章で言っているところの愛。愛のキリストの僕、婢^{はしため}において現れるところの、身証するところの愛です。キリストの愛は、いや実に、愛なるキリストはかく



の如き方であると、それを身証する。愛なるキリストを身のうちに宿す。聖霊をもつてうちに宿すところの身証が、あのコリント前書13章です。

●勝ち得て余りあり

37 ^さ然れど ^{すべ}凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。

「愛したもう者というのは神か、キリストか」なんて、よく学者がやっているよ。「神か、キリストか」なんて、なぜそんな詮索をするか。神であり、キリストである。どっちでもある。両方を持っている。神の愛であると同時にキリストの愛である。どっちも持っているんです。どうして、そんな妙な分析の仕方をするんだろうね、学者というのは。内村先生も、「これはキリストの愛だろう」なんて、いろんな説論を述べたりしている。なにも「キリストの愛だろう」なんて言う必要はない。神の愛であると同時にキリストの愛である。どっちも持っている。パウロがこれを書いているときに、パウロの心の中には、どっちも入っているよ。どうして、そういう弾力性のある取り方ができないんだろうね。だから、力が抜けてしまう。

「勝ち得て余りあり」

と。これはいい訳です。「フュペル」という字がついているので、「素晴らしい勝利である」「フュペルニコーメン」という字です。我々は素晴らしい勝利をしめるといふ。「ニケイ」といふのは「勝利」という字です。我々は素晴らしい勝利をしめる。

「勝ち得て余りある。我らを愛したもうもの、キリストに在つて、」

と。これは「ディア」(によつて)という字が付いているけれども、「我らを愛したもう者によつて」と、「ディア」だけでも、本当は「エン」(の中に)で中に入っているから、「ディア」なんです。「ディア」の前には「エン」がなければダメだ。

パウロは叫んでいるね。彼はキリストで本当に勝利したから。本当にキリストで。まあ、大変なものです。パウロは本当の勇者です。

「我弱きときに強し」

と言っているんだから。

「わがうちなるキリストは無敵である」

と。どうだな？ みんな、力が来たかな？

●この一戦

東郷元帥の自筆の、

「皇国の興廃この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」

の書を古本市で見つけて買ってきた。もう寝られないほどうれしかった。東郷元帥が日本の艦隊を率いて、バルチック艦隊を迎え撃った。私は「この一戦」という言葉に非常に感



激した。我々は全く、この福音の戦いは、「この一戦」です。我々の信仰の「この一戦」を貫いていく。東郷元帥のこの精神でみんな棄身でもって大勝利した。海戦でもってこれだけの大勝利したことは歴史上にないんです。これは書斎に掛けておきます。それで、私は東郷さんに大いにはっぱをかけられて、やるつもりだから。この「一戦」をしろと。我々は福音の「この一戦」です。

ネルソンがあのトラファルガの海戦で言ったのが、

「イギリスは各員が自分の義務を果たすことを期待しているぞ」

と。これがZ旗なんです。東郷元帥もこのZ旗を旗艦三笠に掲げたわけだ。

あなた方各員が、この福音のためには生命がけの戦いをしろ、この一戦である。20世紀のこの危機に、この一戦をやって行けというわけです。

大乗的な大政治家なら、

「どこの国とでも超イデオロギーの交わりをして行きましょう。それでなければ、

平和は来ません」

というだけの態勢が取れてしかるべきではないですか。

「生命も要らず、名も要らず、官位も要らず、金も要らぬ人は始末に困る者なり。

この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は為し得られぬなり」

と。これは西郷南洲の言葉だ。南洲のようなああいふ魂。これがやはり無私の世界、無者の世界です。無限無量のものが入ってくるではないですか。どうだっていいではないですか、本当にキリストが入って来たら。キリストは生命を与えてやまず、光を与えてやまない。

●愛の国

日本人は「日の丸」というこんな素晴らしい国旗を持っていて、自分自身が太陽にならなければダメではないですか。義にして愛であり、生命を与え力を与え、地球を引っ張り回すような驚くべき太陽を瞑想するだけで、凄いことになる。さすがに、ゲートという人は、そのようにして太陽を愛しましたから、彼はあのような大詩人であった。誰でもが、何でもないと思っているものに驚嘆する人が本当のひとなんです。

ヒルティの言葉の中で私が一番好きな言葉の一つは、『眠られぬ夜のために』の「10月7日」のところです。

「我らひとたび全く愛の国に踏み入らんか。この世がどんなに欠けたものであろうとも、なおここは美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きるための機会から成り立っているからである」

愛の火を人の胸に灯す^{とも}ような人。相手に灯さなければしょうがないよ。灯す者は、これは聖霊の愛が灯すことができる。ただ感情的な人間的な愛ではない。もちろん、愛というならば、そこにはいろんな要素が入りますよ。分析し切れません。エロースも、フィロー



スも、アガペーもある。しかし、アガペーが主体となっていなければダメです。それでなかったら、それは観念だよな。これはティリッヒが言っている通りです。

キリストの愛が主体となっている。キリストだって、人間的に言えば、愛したことだつてあるよ、人間だもの。けれども、本当に主体となっているものはいつとも神さまです。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主なる神を愛すべし」

と言ったって、私は無教会にいたときはできなかったよ、苦しくて。

「どういふんだろう、信仰というのはまだ分かるけれども、そういう愛は。どうも困っちゃったな」

と、行き詰まってしまった。聖霊が来たら、これが炎となった。上にも発するし、横にも流れていくし。

東大学長の茅^{かや}さんが「小さき愛」とか言って、実践をみんなに勧めている。あの人もキリスト教らしいね。あの「小さき愛」なんて言ったって、弥陀の本願やキリストの愛が溶けてこなければ、それが持続的には本ものにはなかなかないわけです。もう本来、人間はその衝動はいただいているんだけどね。

●神の愛

³⁸われ確^{かた}く信ず、死も生命^{いのち}も、御使^{みつかい}も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

まあ、何という言い方をパウロはするかと思う。普通の論理的な、普通の論理の頭では、こんな言い方はできない。「高きも深きも」、天界も地獄もと。

死も生命も

肉体的な死もこの世の生命も、

御使も、いわゆる権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある権力者も、高きも深きも

とにかく、その相対界の一切のものが、

我らの主キリスト・イエスにある

「にある」はまさに「エン」だね。

神の愛より我らを離れしむることができない。

と。神の愛はキリストにおいてハッキリと現れたから、特にパウロはここでそう言った。キリスト抜きで、神の愛に沈潜して行っただのが、いわゆる中世の神秘主義者たちです。もちろん、彼らの中にも、キリストを大いに強調しているのがありますけれども。贖罪の意味におけるキリストというものはなかなか出てこない。ゾイゼはかなりその点があったけれども。我々はキリストの贖罪を、贖罪愛のキリストを通らなくては、この愛は来るわけに



いかん。

「何者も離すことができない」と言つて、パウロは凱歌を上げたが、しかし、それになお余韻がある。どういう余韻ですかね。

「その力で敵をも愛し、一切を包摂せよ」

ということ。パウロはそう言つてませんけれども、その余韻を受けとらなかつたら、まだ本当に読めていない。「もうキリストと一つになってしまった。お終い」なんて、そうではない。キリストは己自身を与えてくださった人です。我々もまたキリストと一つになると、己自身を与える人になるわけです。

私にとっては、この兄貴の死が私に与えられた。これは無駄死にさせるわけにいかない。これが、私が弔い、合戦をやっているわけなんです。今からもう50年余り、半世紀以上の昔の話だけれども、生き生きとしてるんだ、私の中には。兄貴の祈りと魂が呻いている。呻きを持つている。

「聖霊言ひ難き呻きをもつて」

だ。その呻きの奥に本当の大讃美をもたらしめるものは、私の兄に対する応え方一つなんだ。

●愛の絶叫

コロサイ書3章12節に、

「¹²この故に汝らは神の選民にして聖なる者また愛せらるる者なれば、慈悲の心・仁慈・謙遜・柔和・寛容を著よ。¹³また互いに忍びあい、若し人に責むべき事あらば互いに恕せ、

ここに「恕」の字が書いてあるね、「思い遣りを持つて」ということ。

主の汝らを恕し給える如く汝らも然すべし。

十字架をもつて赦したんだから。

¹⁴凡て此等のものの上に愛を加えよ、愛は徳を全うする帯なり。」(コロサイ3・

12)

そこに七つあがつているから、「七徳の帯」だ。「帯」という言葉はエレミヤ記13章にも出てきます。

ピリピ書2章5節から8節に、

「⁵汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。

「キリスト・イエスにある如くせよ」

ということ、本来のギリシヤ語は。「キリスト・イエスにある者らしくあれ」ということです。

⁶即ち彼は神の貌にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、

⁷反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。⁸既に人の状にて現れ、

私たちと同じに、



己を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。」(ピリピ2・5～8)

これはみんな愛の実存です。特に際立ったところを、今、エペソ、ピリピ、コロサイから拾っているんですが。エペソ書3章16節に、

「¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、

御霊による力でもって内なる人を強くし、

¹⁷信仰によりて

同じことですよ、

キリストを汝らの心に住わせ、

と、ハッキリ書いてある。キリストに住んでもらえと。

汝らをして愛に根ざし、

キリストという愛に根ざして、

愛を基^{もと}とし、¹⁸キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さのいかばかりなるかを悟り、¹⁹その測り知る可^べからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。」(エペソ3・16～19)

素晴らしい言葉だね。山上の垂訓では、

「汝ら父の全^{まった}きが如く汝らも全かれ」

という。ルカ伝の5章では、

「父の慈悲なるが如く慈悲なれ」

という。「敵を愛せよ」という言葉が後に出ている。

「相手がいい悪いの、どうのこうの」

ではない。父の愛は一切を包括し、一切を照らす太陽の如くという。この不滅の生命力をいただく。愛と生命とは離すことができない。生命即愛、愛即生命です。そういうキリストが来ていたら、何をやっても楽しくてしょうがないですよ、力がくるから。本当に祈りの世界でこのキリストを受けとったら、病氣もどつかへ行ってしまうよな。死人をも甦えらせたキリストです。みんなこれは愛の生命力です。

「こんなキリストの愛から誰が離すことができるか。私が証明して来たではないか」と、パウロは言いたいところなんです。

「我、愚かなるごとくに言わん」

なんて、パウロは時々言っているよ。ロマ書8章は凱歌をあげて絶叫している。本当にロマ書8章の終りの方は、

「神の愛、キリストの愛、聖霊の愛は……」

と言って、愛の絶叫です。「パウロという人は信仰の人だ」なんて言ったって、実はパウロ



の信は、この愛がもの凄い力となっている信なんだ。パウロだって、ヨハネだって、みんな同じだよ。

どうですか、楽しくなったですか。

「かくてこそ、全能の愛、一切を造り、一切を育む」

とは、ゲーテの『ファウスト』の中の言葉です。『芸術の魂』の307頁のところに書いてあります。「芸術の魂」と言ったって、これは福音ですよ。この中に福音が浸透して、ものを言ってるんですから。こんな書き方は、他のドイツ文学者にはできない。ゲーテの詩句を用いて、私はこういうことを書いているところがある。

「生きとし生ける万象の間で最も力強いものは愛の引力である。そしてその愛の根源は神である。愛は限りなく自己を与える愛において至高のものである。限りなく自己を与えるものは自らが無限の霊生を宿すものでなければならぬ。これは神のみがなし得、その霊生を無条件に絶対的に受けたのがキリスト・イエスであった。だからキリストのみが無限の愛、無量の生を与えることができる。この愛がアガペーであり、アガペーの愛の源泉である。かかる神的な愛が人間の罪という癌よりも厄介な事態にぶつかって、これを贖うために生じた自己献供の極致が十字架の贖罪愛(絶対恩寵)である。これのみがたましいを解放し、自由となし、心身の一切の病根を根絶せしめるのである。そして聖霊を注いで霊生に甦えらせる。それが真の浄化、聖化作用である。このような贖罪と霊生化の愛のみが最強の愛で、一切を引き寄せる力を持ち、一切を荷ないあげる力を持ち、一切に生命を与える力をもっている。これのみが永遠の愛の実相である。」(著作集第二巻『芸術の魂』313頁)

なんてなことを書いている。

● 羔の怒

「神の義は」という言葉と、「神の怒は」という言葉がある。そして、今度は「羔の怒」という言葉がある。

この「愛」は甘い愛ではない。「義」が貫いているから、キリストは自分を十字架にかけた。どうにもならんから。「罪」というのは、我執ということ、「エゴイズム」です。エゴ、自我心。これはもう、東西古今において、万人が持っているところの厄介なやつで、癌より悪い。病気の癌なんてものは、今それを治すのができればノーベル賞でしようけれども、ノーベル賞以上なものは、キリストがやってしまった。心の癌が「罪」なんです。心癌というやつ。心癌をこのキリストはやっつけてしまった。これを治してしまった、十字架で。

そして、キリストが持っている生命は、死人をも甦えらせ、一切の病をも癒す。

「盲は目が開き、跛者は立ち、癩病人は潔まり云々」



と書いてあるでしょ。凄じやないですか。福音書に来て——あのキリストは二千年前も今も同じだ——私はこのキリストでもつて治される。

「私は病気を持っていますが、いわゆる健康者よりも、実はこっちは根源的には健康者でございます」

と言えるんですよ、キリストを受けとったら。死んでも死なないんです。そんな絶対無条件の無限無量の恩寵をなお拒んでいれば、今度は「羔の怒」が来るんです、最後の審判が。ミケランジェロも彫刻をしていて、最後はノミを捨てた。未完成なんだ、ある部分は。本当のものは、人間は造り切れない。ダンテもそう言っているんです、終りの天国篇の方で。表現できないと言っている。地上で完成するものなんか、ろくなものではない——「ろくなものでない」と言つては悪いけれども——本当は地上は未完成が本当なんです。未完成の完成というものが本当なんです。

藤井武先生が『羔の婚姻』という詩を書いて、ついに未完成で終わったが、先生のあの詩は未完成の完成だと私は言いたい。生命がけで生きたから。先生はついに完成できなかった。胃潰瘍のために仆れてしまった。命日の7月14日がもうじき来る。6月30日の最後の集会の、先生のあの姿は今でも私は目に浮かびます。その二週間後は、先生はもう生きた先生でなかった、肉体は。1930年、もうじき50周年の時が来るから、その時に私は『無の神学』（著作集第三巻 1982年刊）を内村鑑三・藤井武記念出版として出すつもりです。これは生命がけで書く。

そういう「羔の怒」を実は含んでいるような恐ろしい愛です。こんなに耐え忍んで、こんなにたくさんの方の福音の証者がいるのに、なお世はいよいよ離れていくか。神の怒、羔の怒が来るんです、最後の審判が。……（異言）。もう、言葉にならない。

だけれども、私たちは、本当に贖われた者だから、それにただあぐらをかいてはいかん。いよいよ砕けのキリストを賜り、いよいよ無限無量のキリストを賜りつつ、進んで行くだけです。救われるのは私たちのためではない。神の栄光の現れんためである。キリストの恵みの光が照破せんがためである。遍照せんがためである。

人生そのものは、どんなに惨憺たるものであっても、それは讚美である。だから、ダンテも、ベートーヴェンもみな、本当に讚美している。ブラウニングも「歓喜せよ」と言った。

「歓呼の声をあげてくれ、悲劇が喜劇である」

と。そういう神の勝利の驚くべきドラマであります。

このパウロさんが本当に叫んでいる。もう文字が文字でないから。我々は正に、東郷元帥ではないが、この一戦を、福音の一戦を貫いていきます。

